静岡新聞 2019年1月12日付

論壇

平成を振り返って

バブルからデフレへ

学習院大教授（国際経済学） 伊藤 元重

平成の時代がもうすぐ終わろうとしている。平成の30年はどのような時代だったのだろうか。新しい時代はどのような時代になるのだろうか。年号が変わることで社会が大きく変化するというものでもないかもしれないが、時代の変わり目に大きな流れについて考えることは悪いことではない。

平成元年（1989年）、日本経済はバブルに突入していた。ジャパン・アズ・ナンバーワンなどと言われ、日本が世界第一の経済大国になったような気持ちになっていた。しかし、後からみると、バブルは高度経済成長期からの右肩上がりの経済の最後のあだ花のようなものだった。

それから2年たった平成2年には、バブルの崩壊が起きることになる。株価や不動産価格が暴落した。不動産価格は下がらないものだという不動産神話を信じていた多くの日本人にとっては信じられないことだった。それから7年後の平成9年には金融危機が始まる。山一證券、北海道拓殖銀行、日本長期信用銀行など、絶対につぶれないと考えられていた大銀行や証券会社が次々に破綻していった。残った金融機関も生き残りのために合併を繰り返し、10行以上あった大手金融機関は、最終的に三つのメガバンクに集約されることになった。

金融危機を契機に日本はデフレの時代に入っていく。物価も賃金も下がっていく中で、日本経済の体温は下がっていった。私がいま大学で教えている学生はこの時期やその後に生まれてきた世代で、彼らにとってはデフレの時代が当たり前のようになっていた。こうした時代が長く続いた。

平成20年のリーマン・ショックや、平成23年の東日本大震災とそれに続く原発事故は、日本経済にさらに重くのしかかってきた。最近になってこそ、経済は少し上向きになってきて、企業収益や雇用には明るい兆しが見えている。しかし、国民の中にはデフレマインドが依然として根付いている。そうした中で、世界経済がまたきな臭くなってきた。

新時代の豊かさとは

こうしてみると、平成の30年間は、経済的にみるとあまり良い時代ではなかった。年号と経済が関係あるものではないとしても、年号が変わることでこれまでとは違った時代になってほしいと願うのは私だけではないだろう。

高齢化がさらに進むこと、米中の覇権争いが長期化しそうなこと、ポピュリスト（大衆迎合）的な政権が世界のあちこちに成立して国際政治が不安定化しそうなことなど、将来への不安要因をあげることは簡単だ。ただ、前回のこの欄でも述べたように、長期的な明るい展望を持つことが重要だ。多くの国民が新しい年号の時代に対して明るい希望を持てば、社会や経済もそうした見方を反映するはずだ。

右肩上がりを前提とした20世紀後半の豊かさと、持続的な社会を目指す21世紀型の豊かさは違うはずだ、ということを前回申し上げた。同じような意味で、平成の時代のデフレマインドを、次の時代に引きずってはいけない。過去のマインドを断ち切るためにも、新しい年号の時代がどうあるべきか議論が必要だろう。

＊この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。 無断転載、複製を禁じます。